

毎日をノルマノルマでたゞかかれて

空腹のため倒れし戦友よ

月の夜にあれが鏡であるならば

故郷うつせと思ふ淋しさ

ボルガの流れ

京都府 八木 篤 司

昭和十七年六月、ミッドウェー海戦で日本空母四隻・全艦載機、搭乗兵など多数を失うという残念なニュースが巷間を流れ、非常時という観念が現実味を帯びて我々の日常生活に重圧となつて響いていた。その年の十一月一日、現役で京都伏見中部第三七部隊へ入隊した。

昭和十八、十九年は津、東京などで幹部教育を受けた。

昭和二十年、ハルビンの関東軍野戦貨物廠に幹部と

して勤務していた。その年の四月、米軍が沖繩本島に上陸、大激戦の攻防がくり返されて、日本主要都市にアメリカの爆撃機の襲来が引きも切らず、八月六日広島に、九日には長崎には新型爆弾が投下され、数十万の死者が出たと新聞ニュースで知り愕然としたものであった。その上、満州東部地区に戦車隊を先頭にしたソ連軍が関東軍国境警備軍を攻撃して満州国内に侵攻しつつあるとの情報も入った。

八月十五日、重大放送があるというので、我々将校も兵らも一室に集まって天皇陛下の玉音を聞いた。日本はアメリカなどの連合軍に無条件降伏したと言う。日の前に敵の姿がないので負けたという実感がわかない。

日本国はどうなるのか？ 我々満州に闘っている軍隊は？ 内地や外地にいる大勢の一般日本人は？ すべて不明のまま、日が経つに従つてソ連軍の侵入が始まった。そしてハルビン市内の治安は悪化して来た。北満国境方面から避難して来た老人や女性、子供の多い日本人の人々、息も絶え絶えの様子で続々と入つて

来た。夜間などは放火・強盗・強姦が横行していると
の情報もあり、治安維持のため市内警備に巡回した日
もあった。九月二十日頃、我々は武装解除された。
侵攻して来たソ連軍はハルビン市内の物資、資材また
は工場の機械類まで占領物資として続々列車に積み込
み始めた。我々はその積込みの使役に毎日駅に出動し
たものである。

九月下旬頃、ウラジオストックより日本へ送還され
るのだという話で我々は有蓋貨車に詰め込まれ、マン
ドリン（自動小銃）を持った警備兵の警戒の中、北へ
出発した。国境の街黒河からソ領ブラゴエシチェンス
クへ渡ったのは朝晩寒くなって来た十月五日頃、数日
してシベリア鉄道を西進する貨車の中で内地送還の夢
破れ、ソ連の虚言に無念の涙をのんだのである。

初秋のシベリアの平原や山間や町など半日ほど走っ
ては止まり、機関車の水や人間の食糧など補給しては
走る。世界的に有名なバイカル湖畔を半日余走り、イ
ルクーツクで何時間か止まり、西へ西へ二十日間余、
狭い檻の中のような貨車の旅が続き、到着したのは首

都モスクワ東方エラブカ。ここは平原地帯で、周辺は
農業が盛んな様子であった。しかし我々五百人余は作
業隊を編成して、ここから何時間か列車で走って森林
の中へ降ろされた。

ここはラーダー八八収容所という密林の中の粗末な
小舎の収容所で、伐採作業である。こんな仕事をやっ
たことはなかったが、現地人の監督の話や兵隊の中に
農業をやっていた者もいたので、そんな話を参考にし
て伐採が続いた。直径五十センチメートルから一メー
トルの落葉松の根元に、先ず斧で二十センチメートル
余の切り口をつける、そして反対側から長さ一メート
ル余の二人挽きの鋸で切るのであるが、押す者と挽く
者の呼吸が合わねば鋸の歯が木に食い込まず苦勞す
る。挽き終わって大木が倒れる時は、方向を見定めて
逃げないと枝などにはねられて大怪我をすることがあ
る。毎朝僅かな粥（雑穀）と昼の小さい黒パンでは力
も出ない上に、雪が積もっていて思うように逃げるこ
とも出来ない。毎日が大木との戦いである。他の木の
枝を打ち折りながら轟然と倒れる瞬間は恐ろしい限り

である。この伐採作業は冬の間だけで、翌昭和二十一年春には最初入ったエラブカの収容所に戻って来た。

ここは佐官など日本の将校が多く収容されているところで、帝政時代教会であった建物を収容所に使用しているもので、相当古いものであった。

作業はコルホーズ（国営農場）の農耕であった。現地人の農民がトラクターなどで耕起した広い畑に馬鈴薯など植えたり土寄せや除草など管理をするのだが、我々には道具というものを持たさなかつた。鍬などを武器に日本兵の反乱を恐れていたようである。道具がないから素手でやらねばならない。手袋の支給があるわけがないから指の皮が破れ、血が吹き出す。これでは長続きが出来ないと、不用になった樽のタガに使われていた鉄の輪を外して鍬の代用品を考えるなど、いろいろ工夫をしたものである。しかし大陸の目もくらむ炎熱の暑さ、ちよつとの木蔭もない広い畑の作業では空腹で倒れそうになった。食事の量は少なく、朝食はトウモロコシや粟・黍など雑穀の粉をシャブシャブの粥にして飯盒の蓋に八分日ぐらい、昼は黒バ

ン三〇〇グラム、朝めしるとき粥では腹がもたないと言パンを食ってしまった者がいたが、それでは昼食は何もなく、水だけ飲んで辛抱しなければならなかつた。昼間の作業で腹を空かして帰って来ても、夕食は雑穀の粥で朝より少し固いものが飯盒の蓋に半分ぐらいとスープ（塩汁）、たまに青いトマトが入っていたのが飯盒に一杯。これでは明日のエネルギーも出来ない。ソ連はドイツとの戦いで物資も食糧も使い果たし、農産物も昨年は不作と、国全体が空腹だそうだ。食わず物がなければ我々を日本へ帰せばよいのだと息巻いていたが、現実は何ともならなかつた。畑の中で日射病で倒れる者が出たほどである。一カ月から二カ月毎に女性の身体検査があり、尻の肉をつまんで、瘦せていれば二級（軽作業）またはオカ（屋内又は所内作業）、そうでない者はハラシヨラポータで一級合格だった。その頃我々の心を少しでも慰めてくれたのは、作業に行く途中、トラクタの上から見られるボルガ川の眺めであつた。遠くモスクワの北から広いロシアの豊穰の大地を潤し、遙か南の中央アジアのカスピ海まで多

くの流れを集め、多くの湖を抱き、海のような水量豊かな川、それは悠久の昔から、醜悪な人間社会の興亡と自然の暴力と恩恵を秘めて流れるボルガ川で、我々に命を大切にせよ、達者で日本の土を踏めよと激励してくれ、力強さを与えてくれた感慨は、五十年余後の今も忘れることが出来ないものであった。

昭和二十二年の冬がまたやって来た、最近では日本帰国の噂も出ない。燃料の少ない収容所のペチカでは、零下四十度の夜の寒さに栄養不良も加わり身体の中までも凍るようだった。この冬もまたここで越す運命かと思っていた十一月中旬、突如として列車に乗車準備の命令が出た。私物などほとんどない身軽さである、乗車完了。ダモイか転属か、列車は東へ進むに従い、日本兵のいっぱい乗った有蓋貨車が次々と連結された。帰国万歳と心の中で叫んだがまだ判らない。日本の船に乗るまではと心を引き締めていた。来た時よりずっと早くシベリア鉄道を東へ東へ走り、意外に早くナホトカに到着した。各地から真っ黒に日焼け雪焼けした日本の兵隊が結集していた。どの顔も喜びに溢

れている。

数日して引揚船が日章旗を翻して入港して来たのを見たとき、期せずして「万歳」の声が湧き上がった。もう奥地へやられることはなからう、日本だ、と涙で旗が見えなかった。

昭和二十二年十二月五日、函館に上陸、ソ連の土となるかもしれないと覚悟していたが、今まさに日本の土を踏んだ。身体検査、防疫、調査など数日かかって郷里の京都府船井郡八木町の生家に帰り着いた喜びは終生忘れることはあるまいと思ひ、同時に、未だソ連の大地に眠る多くの戦友の集骨と冥福を祈ります。

鉾山で励まし合う友よ

共に帰国を

島根県 吉野 一郎

島根県八束郡大庭村にて理容業者の長男として大正十二年一月十二日出生し、松江中学校を昭和十五年三